

「声にのせる勇気」

伊東市立北中学校三年 伊藤 翔太

皆さんは、誰かと話すときに、「怖い」と感じることはありますか。ここにいる多くの人が「いいえ」または、「人見知りだから少し怖いかもしれない」と答えると思います。しかし、私は話すことに対する見えない恐怖と戦っています。治らないとされている恐怖と。

私がうまく話せないと感じ始めたのは小学校二年生のときです。話し方を友達から真似されたり、うまく話せずに責められたりすることが多々ありました。それ以降、うまく話せないことはいけないことなのだと思うようになりました。私は、話すことが恐ろしく、関わりたくないものだと思うものになってしまいました。話したいことはある、言葉も浮かんでいる、なのにうまく話せない。どうすればよいか分からない、いつまでも消えないような苦痛を感じました。

そんな苦しい日々が続いていた私に転機が訪れました。三年生に進級したときです。まだ話すことが大嫌いだった私に、担任の先生が「ことばの教室」を勧めてくれました。そこに行ったからといって何か変わるのだろうか、と半信半疑でしたが、わずかな希望をもって通ってみることにしました。

ことばの教室には、自分と同じ境遇の人が四・五人いました。自分だけではない、この人たちなら理解してくれると思えた私は、少しずつ心を開くようになりました。そして、自分が悩んでいるものが「吃音」というものだと知りました。そして、「吃音」についてもっと知りたいと思うようになりました。

小学校五年生になった私は、ある本と出会いました。それは『僕は上手にしゃべれない』という本です。この本には、吃音は治らないと書かれていました。世界では、発達障害の一つとして認められています。日本ではほとんど障害と認められていないことも知りました。障害者ではないけれど、みんなとは何か違う、そんな曖昧さが苦しかったのだと気付いたのです。そして、「あなたはいつまでそうやって逃げ続けるの？しゃべることから逃げ続ける、弱くて臆病なままの人間でいるの？」という言葉にはっとしました。私は吃音だからと言い訳をして、挑戦することから逃げていたのではないかと考えました。これからは逃げない、話すことを好きになれるようにしよう、そう思った私はある決心をしました。それは放送委員になることです。放送委員は校内放送で話す機会が多く、周りの人からとても心配されました。でもやってみなければ分からないと思い、本当に広報委員になりました。恐怖心と戦いながら、半年間役割を全うしました。そこである一つの答えを見つけました。それは、吃音も自分の個性だということです。個性は誰にでもあるのだから怖がる必要はないと思いだした私は、恐怖心が薄れたのか、なぜか吃音がゆるくなり、話すことが楽しいと初めて思えるようになりました。

中学生になった私は、さらに大きな挑戦をしました。生徒会選挙です。選挙の当日は、全校生徒の前で話します。とても緊張し、あの頃の悪夢が蘇ってきました。でも、逃げないと

誓ったことを思いだして挑みました。結果的には、望んでいた役職には就けませんでした。しかし、それ以上のものを得ました。それは、「幸せ」です。話せるということは、素晴らしく、幸せなのだということに気付きました。現在は、保健委員長として、よく放送で話をします。今でもうまく言葉が出てこないことがあります。話すことから逃げないという誓いを忘れず、日々過ごしています。小学生のときからかった友達も、今では私の個性として受け入れてくれるようになりました。

中学三年生になった私の願いは、もっと多くの人に吃音を知ってもらい、少しでも理解してもらうことです。そのためには、言語の専門家である言語聴覚士を呼んで授業をしてもらったり、講演会を開いたりすることも必要ですが、何よりも当事者である私が話すことが大切ではないかと思い、今、こうして皆さんの前に立っています。今日、この機会も私にとっては大きな挑戦です。

私はこれからも、吃音という個性と向き合い、ありのままの自分でいようと思っています。このように思えたのは、挑戦することから逃げなかったこと、そして個性として受け入れ、支えてくれた人たちがいたことが大きな要因です。この世界には、自分と同じよう自身のコンプレックスのせいで、人と関われない人がたくさんいます。これからは自分が、そんな人たちを支えられる存在になりたいです。そして、誰よりも長く、強く、楽しく話し続けたいです。